

スタジオ夜話

第81話 スタジオ夜話

「いまさらですがレコードを楽しむ」Ⅳ

キングレコードの取り組み

☆ はじめに

いよいよ令和2年となりました。

新年あけましておめでとうございます。スタジオ夜話、本年もよろしくお願いいたします。

昨年は台風災害など異常気象により全国で大変な被害となりました。今年に入っても復旧のめどが立たない自治体も多く、筆者は被害に遭われた皆様方の日常を一日でも早く取り戻せるようお祈り申し上げます。

さて今回のスタジオ夜話、前号で予告「いまさらですがレコードを楽しむ」Ⅳ キングレコードの取り組みの取材報告追加分です。

☆ 「アナログレコードへの取り組み」 キングレコード関口台スタジオ追加報告

前号では統括部長の高橋邦明氏とマスターリングエンジニアの匠、上田佳子氏へのインタビューからのお話をしました。

今回は筆者の後輩ではありますが、尊敬できるシステムエンジニア原正和氏のインタビューからのお話です。原氏は今回のキングレコードの取り組みに要請を受け最初から参加しているエンジニアです。

古いプロ用アナログ製品にもその造詣が深く筆者も古いノイマンのマイクロフォンや業務用ではありませんが、マッキントッシュのアンプなどのメンテナンスをよくお願いしています。

☆ 「アナログレコード復活への取り組み」 復活への取り組み Ⅰ

高橋氏や上田氏が20年以上眠っていた2台のカッティングマシンと周辺機器の復活への取り組みは2017年秋頃から本格的に再開します。



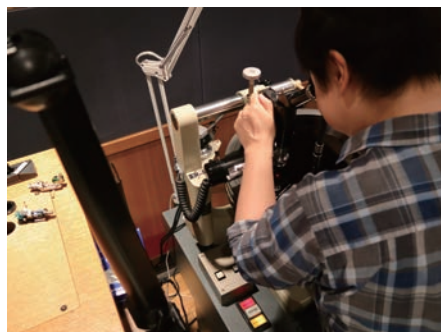
今回稼働することになった、ノイマン VMS-70 驚くほど綺麗に整然と整備されていました。



SX-74 ヘッド部分 チューブは冷却用のヘリウムガスと削りカス用のバキュームチューブ、SX-74 特長の回転数確認用スリットパターンが おしゃれ！



マシンのコントロールボード 中央のメーターは、カッティング溝間隔設定用。カッティングする盤のサイズ指定スイッチがグリーンに点灯。右側には回転スピードの切り替えなどがありコンパクトに構成されている。



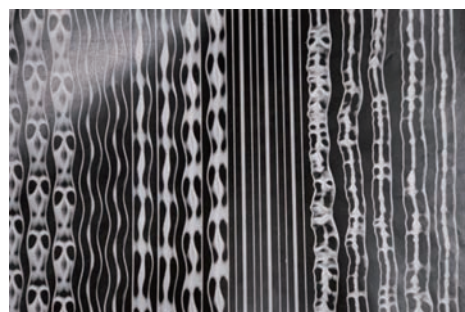
音溝をチェックする上田氏



【参考図】 音溝はこんな風に見えています。



ここがポイント カッターヘッド本体 SX-74



【参考図】 音溝はこんな風に見えています。



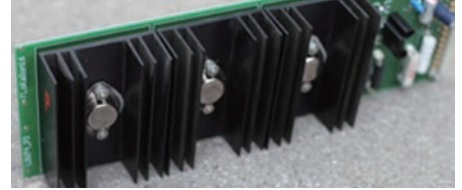
キングオリジナル カuttingアンプ。同社 OB の青木輝彦氏製作によるものです。ノイマンオリジナルはテレフンケン製で管は EL 東芝 6GB 8パラレルプッシュです。



ノイマンオリジナルのアンプ SAL-74 ラック MJ410/MJ423 パワートランジスタのトリプル pp



次に蘇る予定の VMS-66



左の画像は、ラック内に実装されているアンプ基盤



カuttingコンソールはノイマン SP75 VUメーターとピークメータが実装され、各種コンプレッサーやEQなどもあります。各スタジオなどのリンクもここで行われますが、リンクがアナログで行うのかデジタルなのかまたそのフォーマットもこれからの課題です。

原氏は当時を振り返り「・・・当然ですがゴムベルトやアイドラーといった樹脂製品は経年劣化で使い物にはならない状態でしたので、以前からお付き合いのある工場に特注して作ってもらいました。

もちろん、その他の部品も様々な方法で入手を試みてはいますが、都度オリジナルで造ることもあります。

幸い VMS70 の駆動用モーターはテクニクスのモーターに置換されていて動作状態も良く、安定して動いていました。」と説明。

かつて筆者が聞いたことでノイマンに限らずこのモーター系の低い周波数での振動系ノイズが、問題ありとされ置換されて使用されていた事実、他のレコード会社でも同様の措置が取られていたようです。

また前号でお話したカutting用のアンプ東芝 6GB8 パラレル pp は同社 OB の青木輝彦氏製作によるもの、寄贈した専門学校から取り返した？（失礼）本来は VMS66 用のものであることも、わかりました。ノイマン VMS66 は管球式、VMS70 からはソリッドステート式も採用されたという、曖昧な記憶があります。確かソリッドステートのオリジナルカutting用のアンプは SAL74、MJ410/MJ423 パワートランジスタのトリプル pp 2組、ブリッジ接続で 600W だったと思います。

綺麗に修理されカuttingレース横のラックに実装され、その他オプションユニットとともに、配置されています。

また原氏は当時使用していたカuttingコンソールも、健在だったことがやる気

につながったと話してくれました。（VMS 付属のオリジナルコンソールではない。）

☆「アナログレコード復活への取り組み」 復活への取り組み II

管理統括部長の高橋氏は「ハイレゾの時代、私たちは 11.2MHz での 1 ビット、ハイサンプリングによって、量子化ノイズのない、編集のきかない DSD 録音での、一発録音の経験を活かしているので、ダイレクトカuttingにも十分対応できると思っています。」と語り、エンジニアの上田氏は「近い将来カuttingレースは、VMS66 で駆動アンプは、管球式とパワートランジスタ式、VMS70 でも同様に、カuttingまたカuttingヘッド 45/45 方式の、ノイマン SX-68、SX-74 の比較、マスターソースはダイレクト、アナログ、デジタルとワクワク感じばいいです。」と語ってくれました。（筆者注・確かカッターヘッドの装着針が、SX-68 の 15 ミクロンから 9 ミクロンの、SX-74 に変わり周波数特性が向上した。）

ヨーロッパでは、当時 V-L 方式+マトリクスのステレオヘッドで、モノ、ステレオ

のコンパチでのカuttingでした。

一方アメリカではウエストレックス、45/45 系のヘッドが主流。カuttingレースはスカリー社でした。

パンチ？あるカuttingが気に入られ、ジャズなど多くの作品に使われました。ブルーノートはその代表的レーベルです。ノイマンの SX-68 はそうしたニーズに答えた優れたカッターヘッドだったのです。

☆次回は

アナログレコードの売り上げが上昇している現状を踏まえて「いまさらですがレコードを楽しむ」Vです。スタジオ夜話的にお話しします。お付き合いのほどお願いいたします。

年が明けて日一日と寒さが増えています。春の訪れはまだ先のようです。

読者皆様のご健康をお祈りいたします。お身体を大切にお過ごし下さい。

— 森田 雅行 —